

レジリエンスからみた大学生の攻撃性および 攻撃受動性について

廣 美 里¹, 村 松 常 司², 廣 紀 江³

1. はじめに

青少年期における健全なこころの発達には、その後の人生に大きく影響を与える。しかし、人間関係を中心とした青少年をとりまく社会環境は年々複雑化しており、変化に対応できるこころを育むことはなかなか難しいと思われる。いじめ、非行、不登校などが社会問題として取り上げられるようになって久しい。文部科学省では児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査を行っており、いじめの認知件数をはじめ、学校内外における暴力行為発生件数や不登校児童生徒数などの統計をとっている。いじめに関しては、平成22年度の認知件数は77,630件であり、この数字は決して少ないといえる状況ではない¹⁾。特に今年度の事件であった大津市でのいじめ問題は警察の加入があるなどその深刻さをうかがわせる。このほかにも、情報化社会の象徴である、インターネットや携帯電話の普及による表面化しない誹謗中傷の増加に伴い、ネット上での人間関係のねじれによるストレスを抱える青少年の数は計り知れない。

また、青少年期は、人間関係や情報化社会の中でのストレスばかりではない。進学や就職を中心とした自己実現や自己探求を続けていく中でのストレスも少なくない。このようなストレス社会の中で、個人が持つ攻撃性（攻撃のつよさ）や攻撃受動性（他者から攻撃を受けやすい性格傾向）は、その環境下において様々な変化をしていると考えられる。

攻撃性はいじめや児童間の暴力、教師への暴力や非行との関係が深く²⁾、攻撃性が強い子どもは仲間を拒否するまたは仲間から拒否されやすい傾向にあるという研究報告が多々ある³⁾。さらに、子どもにおける攻撃性と生活習慣との関連では、食行動、睡眠および運動においても密接に関係しており、不健康な生活習慣は攻撃性を高めるという報告がある⁴⁾。攻撃受動性の高い傾向にある、いわゆるいじめられる傾向にある生徒は肯定的な自己評価が低いことが認められている⁵⁾。さらに、大学生を対象とした調査で、攻撃受動性は肯定的な自己評価や社会的スキルおよび健康習慣と関連があるという報告もある⁶⁾。以上のように、これまでの先行研究には、攻撃性や攻撃受動性は健康習慣や人間関係をはじめとする社会的スキルとの関連があり、攻撃性や攻撃受動性が高まると健康習慣や人間関係が望ましくない傾向になる可能性がある。

肯定的な自己評価（セルフエスティーム）や社会的スキルのみならず、最近注目されている心理的特性としてレジリエンスがある。レジリエンスとは、困難で脅威的な状況にさらされること

1 名古屋学院大学スポーツ健康学部, 2 東海学園大学教育学部, 3 学習院大学スポーツ・健康科学センター

で一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している状態のことを指す概念である⁷⁾。様々なストレスやネガティブなライフイベントは個人の精神的健康度に影響を与えているが、すべての人がそのストレスによって抑うつや不適応状態に陥るわけではなく、それらを乗り越えて適応していくことができる人もいる。このような人をストレス反応やネガティブな出来事からの立ち直ることができる人、すなわち、「レジリエンスが高い人」ととらえている^{7), 8), 9)}。

青年期は心理的社会的発達において大きな変化が生じる時期とされており、その変化の過程で多くの困難や障害が存在すると考えられる。それらを乗り越え、適応していく過程において、レジリエンスは重要な意味を持つと思われる。レジリエンスはいじめを受けたというネガティブな経験からの立ち直りや、その人が持つ攻撃性（攻撃のつよさ）や攻撃受動性（いじめられやすさ）に関連があるのでないかと考える。

そこで本研究では、大学生におけるレジリエンスが、個人が持つ攻撃性や攻撃受動性とどのような関連があるかを追究した。

II. 研究方法

1 調査対象

調査対象は、西日本にある5大学の学生494名のうち、性別無回答や無回答項目が多い者を除いた449名（男性339名、女性110名）であった。有効回答率は90.9%であった。また、調査時期は2011年10月～11月中旬であった。

2 調査方法

調査は無記名自己記入式の質問紙を用いて、各大学の講義時間を利用して一斉に行われた。

3 調査内容

(1) レジリエンス

小塩ら⁷⁾による精神的回復力(レジリエンス)尺度21項目を用いて調査した。回答は、「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらでもない」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の5段階で行った。また、21項目のうち、14項目はポジティブな項目であり、7項目はネガティブな項目である。また、小塩らは、下位尺度として「新奇性追求」、「感情調整」および「肯定的な未来志向」の3項目をあげている。

(2) 攻撃性

嶋田ら¹⁰⁾の攻撃性尺度23項目を用いて調査した。回答は、「とてもよくあてはまる」、「よくあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階で行った。また、嶋田らは、下位尺度として「身体的攻撃」、「敵意」、「言語的攻撃」および「短気」の4項目をあげている。

(3) 攻撃受動性

藤田ら⁵⁾の攻撃受動性尺度19項目を用いて調査した。回答は、「大いにあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「やや違う」、「まったく違う」の5段階で行った。また、藤田らは、下位尺度として「直接的攻撃受動」、「間接的攻撃受動」および「勉強志向・競争心」の3項目をあげている。

4 データ処理および分析方法

データ処理にはIBM SPSS statistics ver. 20を使用し、各尺度の回答割合の比較には χ^2 検定を、各尺度の得点については2群間における平均値の差の検定にはt検定を、多群間における平均値の差の検定には一元配置分散分析 (Bonferroni) を行い、5%を有意水準とした。

III. 研究結果

1 各尺度の全体傾向および性別比較

(1) レジリエンス

表1は、レジリエンスの各質問項目について、ポジティブな項目は「はい」および「どちらかといえばはい」と回答した者の割合を、ネガティブな項目は「いいえ」および「どちらかといえばいいえ」と回答した者の割合を示したものであり、全体の回答割合が多かった項目から順に表している。全体の回答割合が多かった項目は、「新しいことや珍しいことが好きだ」、「私は色々なことを知りたいと思う」、「困難があっても、それは人生にとって価値あるものだと思う」の順であり、いずれもポジティブな項目であった。逆に全体の回答割合が少なかった項目は、「その日の気分によって行動が左右されやすい」、「あきっぽい方だと思う」、「慣れないことをすることは好きではない」の順であり、いずれもネガティブな項目であった。また、このレジリエンス尺度の信頼度係数 α は0.610であった。

回答割合の性別比較では、「私は色々なことを知りたいと思う」、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」、「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」の3項目において、女子の方が有意に高かった。男子の方が有意に高い項目は一つもなかった。

(2) 攻撃性

表2は攻撃性の各質問項目について、「とてもよくあてはまる」と「よくあてはまる」と回答した者の割合を示したものであり、全体の回答割合が多かった項目から順に表している。全体の回答割合が多かった項目は、「かっとなってもすぐおさまる」、「いやな時はいやだとはっきり言う」、「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」の順であった。逆に全体の回答割合が少なかった項目は、「すぐにけんかをしてしまう」、「友だちの中にはいやな人が多い」、「友だちとけんかをしたことがある」の順であった。また、この攻撃性尺度の信頼度係数 α は0.803であった。

回答割合の性別比較では、「じゃまをする人がいたら文句を言う」、「自分を守るためなら暴力

をふるうのも仕方ない」, 「人に乱暴なことをしたことがある」, および「友だちの中にはいやな人が多い」の4項目について, 男子の方が有意に高く, 「すぐに怒るほうだ」の1項目については女子の方が有意に高かった。

(3) 攻撃受動性

表3は, 攻撃受動性の各質問項目について, 「大いにあてはまる」と「ややあてはまる」と回

表1. レジリエンス各項目の回答割合 (性別比較)

性 別		男子(N=339) N (%)	女子(N=110) N (%)	計(N=449) N (%)
レジリエンス				
新しいことや珍しいことが好きだ	○	268 (79.3%)	88 (80.0%)	356 (79.5%)
私は色々なことを知りたいと思う	○	242 (71.3%)	*90 (81.8%)	332 (74.3%)
困難があっても, それは人生にとって価値あるものだと思う	○	239 (70.9%)	82 (75.2%)	321 (72.0%)
色々なことにチャレンジするのが好きだ	○	235 (69.3%)	*88 (80.0%)	323 (71.9%)
いつも冷静にいられるようこころがけている	○	231 (68.3%)	67 (60.9%)	298 (66.5%)
自分の感情をコントロールできる方だ	○	229 (69.6%)	64 (58.2%)	293 (65.3%)
ものごとに対する興味や関心が強い方だ	○	204 (60.4%)	**81 (74.3%)	285 (63.8%)
自分には将来の目標がある	○	188 (55.6%)	73 (66.4%)	261 (58.3%)
その日の気分によって行動が左右されやすい	×	185 (54.7%)	69 (62.7%)	254 (56.7%)
あきっぽい方だと思う	×	176 (51.9%)	60 (54.5%)	236 (52.6%)
自分の未来にはきっといいことがあると思う	○	178 (52.7%)	57 (51.8%)	235 (52.5%)
慣れないことをすることは好きではない	×	175 (51.6%)	56 (50.9%)	231 (51.4%)
自分の将来に希望を持っている	○	167 (49.4%)	61 (55.5%)	228 (50.9%)
動揺しても, 自分を落ち着かせることができる	○	159 (47.0%)	53 (48.2%)	212 (47.3%)
自分の目標のために努力している	○	150 (44.8%)	57 (52.3%)	207 (46.6%)
ねばり強い人間だと思う	○	145 (42.8%)	47 (42.7%)	192 (42.8%)
将来の見通しは明るいと思う	○	106 (31.7%)	44 (40.4%)	150 (33.9%)
気分転換がうまくできない方だ	×	94 (27.7%)	25 (22.7%)	119 (26.5%)
新しいことをやり始めることはめんどろうだ	×	87 (25.7%)	20 (18.2%)	107 (23.9%)
つらい出来事があると耐えられない	×	73 (21.5%)	26 (23.9%)	99 (22.1%)
怒り (いかり) を感じるとおさえられなくなる	×	67 (19.8%)	26 (23.6%)	93 (20.7%)

- 1) 表内の「○」はポジティブな項目で, 「×」はネガティブな項目である。
- 2) アンケートの回答のうち, ポジティブな項目については, 「はい」+「どちらかといえばはい」の人数と割合を, ネガティブな項目については「いいえ」+「どちらかといえばいいえ」の人数と割合を示した。
- 3) 合計の割合が多い順に掲載した。
- 4) χ^2 検定, $df = 1$, * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$

表2. 攻撃性各項目の回答割合（性別比較）

攻撃性 \ 性別	男子(N=339) N (%)	女子(N=110) N (%)	計(N=449) N (%)
かっとなってもすぐにおさまる	213 (62.8%)	70 (63.6%)	283 (63.0%)
いやな時はいやだとはっきり言う	209 (61.7%)	62 (56.4%)	271 (60.4%)
やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う	186 (55.0%)	68 (61.8%)	254 (56.7%)
仲良くしていても本当に困った時助けてくれない友だちもいると思う	189 (56.1%)	57 (51.8%)	246 (55.0%)
友だちの考えに賛成できない時ははっきり言う	189 (56.1%)	51 (46.4%)	240 (53.7%)
じゃまをする人がいたら文句を言う	*162 (47.8%)	37 (33.9%)	199 (44.4%)
どんなことがあっても人を叩いたり蹴ったりしてはいけないと思う	150 (44.2%)	59 (53.6%)	209 (46.5%)
自分を守るためなら暴力をふるうのも仕方ない	**144 (42.6%)	25 (22.7%)	169 (37.7%)
人に乱暴なことをしたことがある	**131 (38.8%)	22 (20.0%)	153 (34.2%)
叩かれたり蹴られたりしたら必ずやり返す	121 (35.8%)	29 (26.4%)	150 (33.5%)
人からバカにされたりいじわるをされたりしたことがある	112 (33.0%)	36 (32.7%)	148 (33.0%)
叩かれたら叩き返す	116 (34.3%)	28 (25.5%)	144 (32.1%)
友だちにバカにされているかもしれない	99 (29.3%)	24 (21.8%)	123 (27.5%)
ちょっとしたことで腹が立つ	91 (26.9%)	27 (24.8%)	118 (26.4%)
私の悪口を言う人が多いと思う	72 (21.2%)	27 (24.5%)	99 (22.0%)
友だちと考えが合わない時自分の考えを通そうとする	79 (23.3%)	19 (17.3%)	98 (21.8%)
本気でいやだと思う人がたくさんいる	80 (23.6%)	18 (16.4%)	98 (21.8%)
すぐに怒る方だ	62 (18.3%)	*33 (30.0%)	95 (21.2%)
からかわれたら叩いたり蹴ったりするかもしれない	66 (19.5%)	16 (14.5%)	82 (18.3%)
よく口げんかをする	57 (16.8%)	18 (16.4%)	75 (16.7%)
友だちとけんかをしたことがある	53 (15.7%)	19 (17.3%)	72 (16.1%)
友だちの中にはいやな人が多い	*39 (11.5%)	4 (3.7%)	43 (9.6%)
すぐにけんかをしてしまう	26 (7.7%)	4 (3.6%)	30 (6.7%)

1) アンケートの回答のうち、「とてもよくあてはまる」+「よくあてはまる」の人数と割合を示した

2) 合計の割合が多い順に掲載した

3) χ^2 検定, df = 1, * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$

表3. 攻撃受動性各項目の回答割合（性別比較）

攻撃受動性	性 別 男子(N = 339) N (%)	女子(N = 110) N (%)	計(N = 449) N (%)
テストでは少しでもいい点を取りたい	271 (79.9%)	83 (75.5%)	354 (78.8%)
先生の言うことは素直に従うべきだと思う	144 (42.5%)	53 (48.2%)	197 (43.9%)
学校の友人に対し、勉強では負けたくない	97 (28.6%)	* 44 (40.0%)	141 (31.4%)
人から怒鳴られたりすると、言い返せないことがある	90 (26.5%)	33 (30.0%)	123 (27.4%)
人は自分のことについて、けっこう陰口を言っていると思うことがある	58 (17.1%)	23 (20.9%)	81 (18.0%)
実際に行動には出ないが人からいじめられているのではと気にすることがある	51 (15.0%)	25 (22.7%)	76 (16.9%)
塾や習い事のために、食事時間が犠牲になることがある	45 (13.4%)	* 29 (26.4%)	74 (16.6%)
かんしゃくを起こされたり、八つ当たりされたりすることがある	46 (13.6%)	* 27 (24.5%)	73 (16.3%)
友人よりも勉強では頑張っていると思う	51 (15.0%)	20 (18.2%)	71 (15.8%)
周りの人から、足手まといでうとうとうしく感じられていると思うことがある	51 (15.1%)	19 (17.3%)	70 (15.7%)
「目ざわりな人」扱いにされたり集団から仲間はずれにされたりすることがある	46 (13.6%)	21 (19.1%)	67 (15.0%)
腹を立てている人から、声の調子をあげて怒鳴られることがある	54 (16.0%)	10 (9.1%)	64 (14.3%)
怒りをおさえられない人に、汚い言葉で攻撃されることがある	46 (13.6%)	16 (14.7%)	62 (13.8%)
学校の勉強のために友人を犠牲にすることがある	40 (11.8%)	20 (18.2%)	60 (13.4%)
表には出されないが人からねたまれやすい	29 (8.6%)	15 (13.6%)	44 (9.8%)
自分の周りに気の短い人がいると、いじめられそうな気がする	29 (8.6%)	14 (12.7%)	43 (9.6%)
いやな人から、皮肉をよく言われることがある	29 (8.6%)	12 (10.9%)	41 (9.1%)
予習、復習はきちんとやらないと気がすまない	25 (7.4%)	14 (12.7%)	39 (8.7%)
うらみや嫉妬を長い間持たれやすい	21 (6.2%)	13 (11.8%)	34 (7.6%)

1) 攻撃受動性の「大いにあてはまる」+「ややあてはまる」の人数と割合を示した

2) 合計の割合が多い順に掲載した

3) χ^2 検定, $df = 1$, * : $p < 0.05$

答した者の割合を示したものであり、全体の回答割合が多かった項目から順に表している。全体の回答割合が多かった項目は、「テストでは少しでもいい点を取りたい」、「先生の言うことは素直に従うべきだと思う」、「学校の友人に対し、勉強では負けたくない」の順であった。逆に全体の回答割合が少なかった項目は、「うらみや嫉妬を長い時間もたれやすい」、「予習・復習はきちんとやらないと気がすまない」、「いやな人から、皮肉をよく言われることがある」の順であった。また、この攻撃受動性尺度の信頼度係数 α は0.858であった。

回答割合の性別比較では、「学校の友人に対し、勉強では負けたくない」、「塾や習い事のために、食事時間が犠牲になることがある」および「かんしゃくを起こされたり、八つ当たりされたりすることがある」の3項目について、女子の方が有意に高かった。男子の方が有意に高い項目はなかった。

2 各尺度得点の全体傾向と性別比較について

(1) レジリエンス得点

レジリエンス尺度のポジティブな項目について、「はい」を5点、「どちらかといえばはい」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかといえばいいえ」を2点、「いいえ」を1点とし、ネガティブな項目について、「いいえ」を5点、「どちらかといえばいいえ」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかといえばはい」を2点、「はい」を1点として、合計したものをレジリエンス得点とした。

表4に示すように、レジリエンス得点の全体の平均は72.3(標準偏差 以下S. D. 11.8)であった。性別比較では男子が72.0 (S. D. 12.2), 女子が73.1 (S. D. 10.5) であり、有意な差はみられなかった。また、その下位尺度3項目についても性別比較では有意な差はみられなかった。

表4. レジリエンス得点および下位尺度各得点の性別比較

性別	レジリエンス得点		新奇性追求得点		感情調整得点		肯定的未来志向得点	
	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数
男 子	72.0 (12.2)	321	25.6 (4.7)	333	29.7 (5.9)	336	17.0 (4.6)	328
女 子	73.1 (10.5)	105	26.3 (4.3)	108	28.9 (5.1)	109	17.8 (3.8)	108
計	72.3 (11.8)	426	25.7 (4.6)	441	29.5 (5.7)	445	17.2 (4.4)	444
t検定	N.S.		N.S.		N.S.		N.S.	

(2) 攻撃性得点

攻撃性尺度23項目のうち、「かっとなってもすぐおさまる」および「どんなことがあっても人を叩いたり蹴ったりしてはいけないと思う」の2項目は、「まったくあてはまらない」を4点、「あまりあてはまらない」を3点、「よくあてはまる」を2点、「とてもよくあてはまる」を1点とし、他の21項目は、「とてもよくあてはまる」を4点、「よくあてはまる」を3点、「あまりあてはま

らない」を2点,「まったくあてはまらない」を1点として合計得点を攻撃性得点とした。

表5に示すように, 攻撃性得点の全体の平均は50.2 (S. D. 8.5) であった。性別比較では, 男子が50.7 (S. D. 8.7), 女子が48.3 (S. D. 7.6) で男子の方が有意に高かった。また, その下位尺度については身体的攻撃得点において, 男子の方が有意に高かったが, 他の3項目の得点については有意な差はみられなかった。

表5. 攻撃性得点および下位尺度各得点の性別比較

得点 性別	攻撃性得点		身体的攻撃得点		敵意得点		言語的攻撃得点		短気得点	
	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数
男 子	*50.7 (8.7)	325	*13.8 (3.5)	334	12.8 (3.2)	336	12.8 (2.7)	336	11.5 (3.0)	335
女 子	48.3 (7.6)	107	11.7 (3.5)	110	12.5 (3.0)	109	12.3 (2.2)	109	11.7 (2.8)	109
計	50.2 (8.5)	432	13.3 (3.6)	444	12.7 (3.1)	445	12.7 (2.6)	445	11.5 (2.9)	444
t検定	P < 0.05		P < 0.01		N.S.		N.S.		N.S.	

(3) 攻撃受動性得点

攻撃受動性尺度19項目について,「大いにあてはまる」を5点,「ややあてはまる」を4点,「どちらでもない」を3点,「やや違う」を2点,「まったく違う」を1点として, 合計したものを攻撃受動性得点とした。

表6に示すように, 攻撃受動性得点の全体の平均は44.8 (S. D. 11.3) であった。性別比較では男子が43.9 (S. D. 11.3), 女子が47.5 (S. D. 11.1) で女子の方が有意に高かった。また, その下位尺度については, 間接的攻撃受動得点および勉強志向・競争心得点において, 女子の方が有意に高かったが, 直接的攻撃受動得点については有意な差はみられなかった。

表6. 攻撃受動性得点および下位尺度各得点の性別比較

得点 性別	攻撃受動性得点		直接的攻撃受動得点		間接的攻撃受動得点		勉強志向・競争心得点	
	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数	平均 (S. D.)	人数
男 子	43.9 (11.3)	332	13.2 (4.7)	336	12.5 (4.8)	337	18.3 (4.4)	336
女 子	*47.5 (11.1)	109	13.9 (4.5)	109	*13.8 (5.0)	110	**19.8 (4.8)	110
計	44.8 (11.3)	441	13.4 (4.7)	445	12.8 (4.9)	447	18.7 (4.6)	446
t検定	p < 0.05		N.S.		p < 0.05		p < 0.01	

3 レジリエンス3群からみた攻撃性得点および攻撃受動性得点の比較

(1) レジリエンス3群からみた攻撃性得点および下位尺度得点の比較

レジリエンスと攻撃性を比較するために、レジリエンス得点の平均値±1S. D. で対象者を高群・中群・低群の3群に分けた。その結果、高群は85以上で62名、低群は60以下で56名、その中間の中群は61～84で314名であった。

これら3群間の攻撃性得点を比較した結果、表7に示すように、攻撃性得点は、レジリエンス中群および低群の攻撃性得点は高群より有意に高かった。また、その下位尺度においても3群間に有意な差はみられた。身体的攻撃得点、敵意得点および短気得点ではレジリエンス高群の得点がありに低かったが、言語的攻撃得点では、レジリエンス低群の得点がありに低かった。

表7. レジリエンス得点3群からみた攻撃性得点および下位尺度各得点の比較

得点 レジ3群	攻撃性得点		身体的攻撃得点		敵意得点		言語的攻撃得点		短気得点	
	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数
高 群	46.5(8.1)	62	11.7(3.6)	63	11.1(2.9)	64	13.3(3.0)	64	10.3(2.7)	63
中 群	50.5(8.4)	314	13.5(3.6)	323	12.8(3.1)	322	12.8(2.5)	323	11.5(2.9)	323
低 群	52.3(8.1)	56	13.7(3.3)	58	13.9(2.9)	59	11.6(2.6)	58	13.0(2.8)	58
一元配置 分散分析	p < 0.01		p < 0.01		p < 0.01		p < 0.01		p < 0.01	
多重比較	高群<中・低群		高群<中・低群		高群<中群<低群		高・中群>低群		高群<中群<低群	

(2) レジリエンス3群からみた攻撃受動性得点の比較

レジリエンスと攻撃受動性を比較するために、レジリエンス得点の平均値±1S. D. で対象者を高群・中群・低群の3群に分けた。その結果、高群は85以上で63名、低群は60以下で59名、その中間の中群は61～84で319名であった。

表8. レジリエンス得点3群からみた攻撃受動性得点および下位尺度各得点の比較

得点 レジ3群	攻撃受動性得点		直接的攻撃受動得点		間接的攻撃受動得点		勉強志向・ 競争心得点	
	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数	平均(S. D.)	人数
高 群	41.6(11.3)	63	11.7 (4.8)	63	10.1 (4.2)	64	20.5 (5.3)	64
中 群	45.0(11.5)	319	13.5 (4.6)	323	13.0 (4.9)	324	18.6 (4.4)	323
低 群	47.0(10.4)	59	14.4 (4.5)	59	14.8 (4.5)	59	17.8 (4.4)	59
一元配置分散分析	p < 0.05		p < 0.01		p < 0.01		p < 0.05	
多重比較	高群<低群		高群<中・低群		高群<中群<低群		高群>低群	

これら3群間の攻撃受動性得点を比較した結果、表8に示すように、レジリエンス得点低群の攻撃受動性得点は高群と比較して有意に高かった。また、その下位尺度においても3群間に有意な差はみられた。直接的攻撃受動得点および間接的攻撃受動得点では、レジリエンス高群の得点が有意に低かったが、勉強志向・競争心得点では、レジリエンス高群の得点が有意に高かった。

IV. 考察

本調査における大学生のレジリエンス項目の中では、「新しいことや珍しいことが好きだ」が79.5%と最も高く、以下、「私は色々なことを知りたいと思う」、「困難があっても、それは人生にとって価値あるものだと思う」、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」が続いた。レジリエンス得点は、男子72.0 (12.2)、女子73.1 (10.5)であり、性別による差はみられなかった。冨永ら¹¹⁾は、大学生を対象とした調査でレジリエンスには性差がみられないことを報告しており、今回はその結果と同じであった。

本調査における大学生の攻撃性項目の中では、「かっとなってもすぐにおさまる」が63.0%と最も高く、以下、「いやな時はいやだとはっきり言う」、「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」、「仲良くしていても本当に困った時助けてくれない友だちもいると思う」が続いた。攻撃性得点は、男子50.7 (8.7)、女子48.3 (7.6)であり、男子の方が高かった。また、その下位尺度において、身体的攻撃得点が男子の方が高かった。佐々木ら¹²⁾は、大学生の攻撃性の性差について、敵意以外の下位尺度で性差が存在し、短気では女子の得点が高く、身体的攻撃、言語的攻撃および総合得点では男子の方が高かったと報告しており、今回の結果も攻撃性得点および身体的攻撃得点では一致した。

本調査における大学生の攻撃受動性項目の中では、「テストでは少しでもいい点を取りたい」が78.8%と最も高く、以下、「先生の言うことは素直に従うべきだと思う」、「学校の友人に対し、勉強では負けたくない」、「人から怒鳴られたりすると、言い返せないことがある」が続いた。攻撃受動性得点では、男子43.9 (11.9)、女子47.5 (11.1)であり、女子の方が高かった。また、その下位尺度において、間接的攻撃受動得点および勉強志向・競争心得点は女子の方が有意に高かった。服部ら^{13),14)}は、大学生の攻撃受動性の性差について調査し、女子の方が攻撃受動性は高いと報告しており、今回の結果と一致した。

レジリエンス得点を3群（高・中・低）に分けて攻撃性得点を比較してみると、レジリエンス得点が高いと攻撃性得点は低いという結果であった。また、その下位尺度の得点の比較においても、身体的攻撃、敵意、短気においてはレジリエンスが高いとその得点は低く、言語的攻撃においては、レジリエンスが高いとその得点は高く、他の因子とは逆の結果であった。島井¹⁵⁾は攻撃行動と自己への肯定的な感情との関連を検討し、言語的攻撃と怒り主張性はほとんどすべての自己への肯定的な評価との間に高い正の相関があり、自分の権利を主張したり、意見を戦わせたり、怒っていることを伝えるという傾向は自尊感情が高いことと強い関連性があることを報告している。服部ら¹⁶⁾は、レジリエンスとセルフエスティーム（自尊感情）の関連を調査しており、

セルフエスティーム（自尊感情）が高いとレジリエンスも高いと報告している。このことから、自己への肯定感情との関連がある言語的攻撃が高いとレジリエンスが高いという関連性がうかがえる。

次に、レジリエンス得点3群と攻撃受動性得点を比較してみると、攻撃性と同様に、レジリエンス得点が高いと攻撃受動性得点は低いという結果であった。また、その下位尺度においては、直接的攻撃受動、間接的攻撃受動においては、レジリエンスが高いとその得点は低く、勉強志向・競争心においては、レジリエンスが高いとその得点は高く、他の因子とは逆の結果であった。攻撃受動性はいじめられやすさを表す尺度であるが、いじめられやすい性質の持ち主は、人間関係の中で何らかの攻撃をされないように、そして自分の中にあるネガティブな感情を少しでも打ち消すために、勉強に夢中になるなど、何かに没頭したり、他に競争できるものを探したりなどの行動の工夫をする傾向にあると考えられる。攻撃受動性の中の勉強志向・競争心因子の心理特性が困難な状況から立ち直ることができるレジリエンスという心理特性との関連があると考えられる。香取¹⁷⁾は、過去のいじめ体験による心的影響には、情緒的不適応、同調傾向、他者評価への過敏というマイナスの影響と、他者尊重、精神的強さ、進路選択への影響というプラスの影響があると報告している。廣ら¹⁸⁾は、過去のいじめを受けた経験の有無と攻撃受動性の関連を調査し、いじめを受けた経験群の方が攻撃受動性は高かったと報告をしている。本研究における攻撃受動性の中で、レジリエンスが低いと直接的攻撃受動性や間接的攻撃受動性は高くなり、いじめを受けた経験によるマイナスの影響によるものと関連があり、レジリエンスが高いと勉強志向・競争心因子は高くなり、いじめを受けた経験によるプラスの影響と関連があるのではないかと考える。

攻撃性は個人の持つ特性でのあり、自己主張や達成能力などの積極的肯定的側面もあり、すべてが悪い方向へ向かうものではない心理特性であると考ええる。島井¹⁵⁾は、自尊感情が高ければ高いほど、または特定の心理である、賞賛されたい、注目されたいという自尊感情の場合には、その程度が過ぎて暴力につながるという危険性を指摘している。山崎¹⁹⁾は、攻撃性適正化教育として、自律的でセルフエスティームに満ちた性格特性への教育や他人を思いやる心の育成に着目している。攻撃受動性も個人の持つ特性であり、ストレスや人間関係のねじれからこの傾向を高くしてしまう可能性がある。しかし、攻撃受動性に着目した教育支援の方法はまだ報告が少なく、今後検討していく課題であると考ええる。

原ら²⁰⁾は、大学生を対象にしてレジリエンスとストレス反応の関連を調査しており、その結果、ストレスが高い場合はもちろん、低い場合でもレジリエンスは機能している可能性があると報告している。レジリエンスが困難な状況にも関わらずよく適応している状態、あるいは心の弾力性、精神的回復力という心理特性であることを踏まえると²¹⁾、レジリエンスは、危機に陥った場合の適応の維持や回復のためだけでなく、危機に陥っていない場合でも予防要因として役割を果たしているとしている。これは、レジリエンスは精神的な健康度をより良い状態に維持することができる特性を示していると考えられる。このことは、攻撃性適正化教育や攻撃受動性の高まりをおさえるために、レジリエンスが何かプラスの働きかけをする特性があると考ええる。

青少年が健全な人間関係を育み、多様な価値観が存在する現代社会を生き抜くためには、社会性を養い、ストレス対処能力を高めていくことが求められていると思われる。そのために、青少年が社会的スキルを身につけ、肯定的な自己評価を高めていくことは大切であると考えられる。さらに、困難な状況に左右されない心の安定状態を保つというレジリエンスが高いことも大切であるのではないだろうか。レジリエンスが高いと攻撃性や攻撃受動性が低かったことから、何らかのストレスによって高まる可能性のある攻撃性や攻撃受動性を適正に保つためには、レジリエンスを高めることが教育や支援の場で大切なことであると考えられる。

V. まとめ

本研究では、大学生449名（男性339名、女性110名）を対象に、レジリエンスと攻撃性および攻撃受動性の関連を追究し、以下の結果を得た。レジリエンス得点の性別による差はみられなかったが、攻撃性得点では男子の方が有意に高く、攻撃受動性得点では女子の方が有意に高かった。また、レジリエンス得点からみた攻撃性得点の比較では、レジリエンス得点が高いと攻撃性得点が低かった。さらに、レジリエンス得点からみた攻撃受動性得点では、攻撃性と同じく、レジリエンス得点が高いと攻撃受動性得点は低かった。攻撃性や攻撃受動性は個人が持つ特性であり、ストレスや生活習慣の悪化などでその傾向が高まる危険があり、望ましい生活習慣や人間関係のためにはその特性が適正に保たれることが大切であると考えられる。レジリエンスが高いと、攻撃性や攻撃受動性は低い傾向にあるという今回の結果から、これら攻撃性や攻撃受動性を適正に保つために、レジリエンスは好影響を与えると可能性があると考えられる。

VI. 参考文献

- 1) 文部科学省：平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」公表資料http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf
- 2) 濱口佳和：学校における問題・不適応行動と攻撃性，攻撃性の行動科学（発達・教育編），135-151，山崎勝之，島井哲志（編），ナカニシヤ出版，京都，2002
- 3) 前田健一：攻撃性と仲間関係，攻撃性の行動科学（発達・教育編），122-134，山崎勝之，島井哲志（編），ナカニシヤ出版，京都，2002
- 4) 曾我祥子：攻撃性と子どもの生活習慣，攻撃性の行動科学（発達・教育編），182-193，山崎勝之，島井哲志（編），ナカニシヤ出版，京都，2002
- 5) 藤田定，牧真吾：中学生における攻撃受動性とセルフエスティーム，生活習慣の相関に関する研究，平成14年度愛知教育大学教育研究改革・改善プロジェクト報告書，12-47，2003
- 6) 服部洋兒，金子恵一，服部祐兒，村松成司，村松常司：大学生のセルフエスティームと社会的スキルからみた攻撃受動性に関する研究，スポーツ整復療法学研究，7(3)，171-181，2006
- 7) 小塩真司，中谷素之，金子一史，長峰伸治：ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—，カウンセリング研究，35(1)，57-65，2002

- 8) 石原由紀子, 中丸澄子: レジリエンスについて, その概念・研究の歴史と展望, 広島文教女子大学紀要, 42, 53-81, 2007
- 9) 長田春香, 岩本文月, 大秦加奈子, 岡田洋子, 蒲原由記, 筒井翔子, 松井希代子, 関 秀俊: 中学生の日常ストレスにおけるレジリエンスの意義, 小児保健研究, 65(2), 246-254, 2006
- 10) 嶋田洋徳, 神村栄一, 宇津木成介, 安藤明人: 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2), 因子的妥当性, 信頼性, 因子間相関, 性差の検討, 日本心理学会第62回大会発表論文集, 931, 1998
- 11) 富永美穂子, 清水益治, 森 敏昭, 佐藤一精: 大学生の食生活を中心とする生活リズムと精神的安定度との関係, 広島大学教育学部紀要, 2(48), 315-323, 1999
- 12) 佐々木恵, 山崎勝之: 日本版Buss-Perry 攻撃性質問紙の因子構造ならびに大学生における攻撃性と精神健康の因果関係の検討, 学校保健研究 43(6), 474-481, 2002
- 13) 服部洋兒, 金子恵一, 服部祐兒, 村松成司, 村松常司: 大学生の健康習慣からみたセルフエスティームおよび攻撃受動性について, スポーツ整復療法学研究, 8(3), 143-150, 2007
- 14) 服部洋兒, 金子恵一, 服部祐兒, 村松成司, 下村淳子, 村松常司: 大学生の小学生時代に受けたしつけ経験と現在のストレス対処行動および攻撃受動性との関係, 東海学校保健研究, 31(1), 9-20, 2007
- 15) 島井哲志: 攻撃性とライフスキル教育, 攻撃性の行動科学 (発達・教育編), 195-210, 山崎勝之, 島井哲志 (編), ナカニシヤ出版, 京都, 2002
- 16) 服部祐兒, 村松常司, 廣 美里, 吉田 正, 服部洋兒, 金子修己, 金子恵一, 平野嘉彦, 藤猪省太, 廣 紀江, 石田敦子: レジリエンスの視点からみた大学生のストレス対処行動—セルフエスティーム, 対人ストレスイベントとの関連—, 東海学校保健研究, 36(1), 29-41, 2012
- 17) 香取早苗: 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究, カウンセリング研究, 32(1), 1-13, 1999
- 18) 廣 美里, 吉田 正, 村松常司, 服部祐兒, 服部洋兒, 平野嘉彦, 藤猪省太, 廣 紀江, 石田敦子: 大学生のいじめを受けた経験と攻撃受動性およびレジリエンスに関する研究, 東海学校保健研究, 36(1), 103-113, 2012
- 19) 山崎勝之: 攻撃性の適正化教育, 攻撃性の行動科学 (発達・教育編), 211-235, 山崎勝之, 島井哲志 (編), ナカニシヤ出版, 京都, 2002
- 20) 原 郁水, 烏川美香, 藤井悠子, 古田真司: 大学生のレジリエンスとストレス反応及び不定愁訴の関連, 客観的ストレスの違いによるレジリエンスの効果の比較, 東海学校保健研究, 35(1), 3-16, 2011
- 21) 無藤 隆: 弾力性 (レジリエンス), 心理学, 184-189, 有斐閣, 東京, 2004

(本研究の一部は2012年度名古屋学院大学研究奨励金の成果である)